平成 20 年度指定

本源寺霊屋、表門及び津山藩主森家一門墓　附参道、石灯籠

（本源寺霊屋）

本源寺は、もとは慶長十二年（1607）に津山藩主森忠政が移転した龍雲寺で、天和三年（1683）の忠政の五十回忌に当たり、忠政の院号に因み改称されたものである。

現在、森忠政ら二十八基の位牌を祀る霊屋は、三間四方、宝形造、背面半間庇付き、一間向拝付き（向唐破風造）で、屋根は銅板葺である。霊屋本体は全て角柱とし、側まわりに舟肘木を用いるほかは組物はない。これに対し向拝は、唐草文様の木製垂木端飾り、頭貫の亀甲花菱文様地紋彫、木鼻の青海波文様、柱頂部に胡麻殻決（じゃく）り金襴巻の浮彫など装飾性にあふれている。内部は、中央二間四方を上段、その後方に仏前、位牌壇などが設けられている。

表門は、四脚平唐門形式、銅板葺きである。頭貫地紋彫など緻密な装飾がなされている。霊屋の建立年代は「武家伝聞記」の記事から寛永十六年（1639）と考えられ、表門の建立時期も同時期とみられる。霊屋は平成十八年度から平成十九年度にかけて解体修理が実施された。なお、入側腰障子腰張の菊籬（まがき）図は、文化年間（1804~1818）頃の中央画壇における洗練された作風を示している。

霊屋の背後には、森家一門七人の五輪塔墓がある。西から晃昌院（於菊、森忠政娘）、智勝院（於岩、森忠政妻）、本源院（森忠政）、雄心院（森長可）、霊光院（森忠継）、碧松院（森忠政姉・関成次母）、光徳院（関成次・森忠政甥）と並ぶ。

基礎石垣は、凝灰岩の切石を用い、五輪塔は花崗岩製である。やや小型の碧松院の墓を除き、全体の高さは四メートルに達する。中でも参道の正面にある森忠政墓は五・一五メートルと大型で、墓前には二基の石灯籠も残されている。また、表門から霊屋及び森家一門墓に至る凝灰岩製の石敷参道は、霊屋及び墓の造営に伴い、十七世紀中期から後期にかけて順次整備されていったとみられる。

霊屋、表門及び墓ともに、国持大名である森家一門の菩提所としての威厳を保ち、すでに県指定重要文化財となっている妙法寺本堂や愛染寺鐘楼門などとともに、江戸時代前期の津山における高い技術水準を示す建造物である。